

|||||  
 卷 頭 言  
 |||||

## 「どぶに黄金を撒く勇氣」を



金 持 徹

近年、貿易摩擦がひどくなり、日本が新技術の「種（たね：seeds）」を輸入して急速に実用化する姿に、海外からの反発が強まってきた。「種」の問題が難しくなって、何人かの中央研究所長さんは私にいわれた「今までは順応性に富んだ若い研究員が多数必要でしたが、今後は一匹狼も大事にしなければと考えています」。しかし、何人かの経営者は私にこういわれた。「企業には株主に対する責任や従業員の生活に関する責任など、いくつもの責任があります。企業はハッキリしない研究に費用をつぎ込むには向きません」。

かつて最も活発に「種」を生み出した国はイギリスであるが、あのサッチャー首相は、損な種つくりの役目を他の国に譲って、トクな「実用化する国」になるための大改革を断行してしまったとのことである。わが国が技術面で他を引き離して繁栄を続けるためには、種つくりというソンの役割について、責任を分担しなければならない時代が来ているのではないだろうか。

そのためには、予定の期限内に成果が出そうな研究にだけ、まともな研究費が支給される状態を改めねばならない。また、この意味で大学という研究機関を見直す必要がある。大学は本来「種」つくり向きの機関だからである。大学の研究者は、自分の共同研究者となる学生のために、研究の基本的な原理や歴史的な発展経過をしょっちゅう説明させられるが、この、頻繁に根本に立ち戻って考え、それを人前で口にするということが、新しい飛躍のために有効なのである。そのほかにも大学が「種」作りに適している性質はいろいろある。もし、当面、教員一人あたりの学生数を数十パーセント削減し、予算を2倍程度に増やすなどの措置がとられれば、多くの大学が息を吹き返すだろうと思われる。

この意見を「どぶに黄金を撒くようなものだ」と評されたお役人があった。なるほど、一方で日本の多くの大学には、「貧すれば鈍する」といわれてもしょうがない部分ができまっているし、他方では素晴らしいアイデアなどというものは、本来そう簡単に生まれるものではない。しかし、幸いにもわが国には多数の大学があり、大勢の先生がおられるから、やがてこの母数の大きさが確率の低さをカバーして効果を発揮し始めることが期待される。

内需拡大のための景気振興策をはじめ、国際的責任のための予算は巨額であるが、そのごく一部を、大学に息を吹き返させるために振りあてることが、今非常に有効であるように思われる。

（神戸大学工学部）